

# 身体技法論においてテクノロジーとは いかなる問題でありうるか

文  
吉川侑輝

共同研究 ● テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学術的研究

本共同研究の目的は、情報通信技術(ICT)などを利用する場面に着目することで、既存の身体技法論を、現代的に更新することである。2年目にあたる2017年度には、3回の研究会を実施した。メンバーらの専門は、文化人類学、民俗学、そして社会心理学など、多岐にわたる。各研究会では、メンバーが自分の研究の進捗を報告するだけでなく、専門的な研究者や実践家たちを招待し、多角的な視点をとり入れた。

本研究会のメンバーらは多様なバックグラウンドをもっているだけでなく、調査地も、日本、東南アジア、そしてヨーロッパと多様である。このようなメンバー構成や研究課題をみると、メンバー各自が、それぞれ別種の課題にとりくんでいるようにもみえるだろう。では、こうした個別の研究課題と本共同研究の課題は、どう関係しているだろうか。本稿ではこのことを、メンバーによる3つの研究を紹介することによって素描する。

## 2つの方針

紹介の前に、本研究の前提となっている認識をのべておこう。それはICTをはじめとした新しいテクノロジーの一般化によって、従来の身体技法論が、2つの側面において更新される必要があるという認識である。

第1の側面は、研究対象の変化である。わたしたちの社会生活において、ICTをはじめとしたさまざまなテクノロジーが欠かせないものになっていることは明白である。そしてこうした事情は、人びとの身体的なふるまいに、なんらかの変化をもたらすはずだ。他方において、人びとのふるまいを対象としてきたマルセル・モース(1976)以来の身体技法論は、身体が新たな技術にとりかこまれる様相を、積極的に主題化してこなかった。しかし、もし上に述べたような事情があるのなら、人びとのふるまいについての研究もまた、その対象を再編する必要がある。

第2の側面は、研究手法の変化である。テクノロジーの一般化は必然的に、研究対象となっている人びとだけでなく、身体技法を研究する研究者たちが利用する手法にまでおよんでいる。であるなら、このような研究を研究者自身が省察的にとらえなおすこともまた、身体技法論を更新するために必要な作業であるといえる。

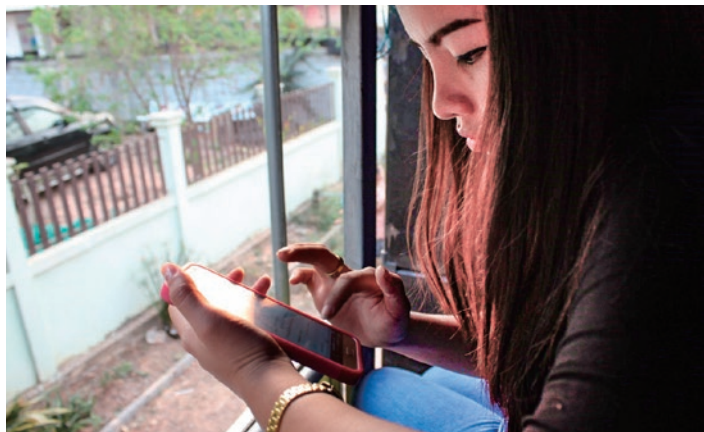
## 研究対象としてのテクノロジー

身体技法論は、対象と手法という2つの側面において更新されなくてはならない。ではこの方針は、本研究においてどのように具体化されているだろうか。まずは前者にかかわる研究として、平田晶子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)と岩瀬裕子(首都大学東京)による研究を紹介する。

本研究の代表者である平田の「ソーシャル・メディアのインターフェース状況下で保障されるもの—東北タイ芸能者と機械の相互作用」と題された報告は、テクノロジー利用が一般化することで身体技法がどのように再編されているかの一端を明らか

にするものである。平田の研究は、タイ東北地方における芸能者であるモーラム(詩形をなす長編歌物語の名手)たちが、その公演や広報といった活動においてソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS)やスマートフォンを活用する場面に着目することによって、顧客との間に築かれるサービスをめぐる信頼や、芸能活動を遂行するうえでの安全を確保・強化していく実践を明確にするものだ。

現在タイでは、都市・農村にかかわらず、SNSやスマートフォンが、さかんに利用されている。こうした状況において、あるモーラムたちは、自分たちの公演を契約するさいにSNSを活用する。モーラムたちはある日、契約を締結するために、事務所から100キロ以上はなれた村落にむかった。書面によって契約をかわしたモーラムたちがその直後にしたことは、契約者と記念撮影をおこない、写真をSNSにアップロードすることであった。このSNSへの投稿に対して、何百人もの人びとがコメントを書き込み、「いいね」ボタンを押すなどのリアクションをした。平田によれば、契約が口頭でなされるタイ社会では、その締結を他人の目に触れさせることが重要である。かくしてあるひとつの公演の契約は、何百人もの「証人」たちを、SNSにおいて獲得したというわけだ。先述のように、スマートフォンやSNSは、タイの日常にくみこまれている。そしてこうした技術は、芸能者たちが安全と信頼を築くための身体技法にもまた、くみこまれているのである。



得度式の山車のうえでスマートフォンを利用して歌詞とコードを確認する芸能者(2016年3月27日、平田晶子撮影)。

岩瀬の「管理と実践におけるテクノロジー利用に関する一考察—スペイン・カタルーニャ州人間の塔のベリャを事例に」と題された報告は、スペインのカタルーニャ州における「人間の塔」をめぐるテクノロジー実践に着目するものである。岩瀬は、平田とは対照的に、人びとの参加を阻害してしまいそうなテクノロジーが、積極的にしりぞけられる事例に着目している。

人間の塔は、守護聖人祭などにおいて200年以上にわたって続けられているとされる身体実践である。肩のうえに次々とひとが乗る形式で塔が築かれ、地縁や血縁からなる有志のグルー



指紋認証システムを利用してメンバーの参加を把握する人間の塔のメンバーたち(2017年9月17日、岩瀬裕子撮影)。

ブ同士が、その構造の複雑さや段数を競技しあう。現在は6段以上のものが人間の塔とされ、その段数は、ときに10段にまでおよぶ。

岩瀬によれば、調査地において、10段の人間の塔を形成するためには800から1,000人程度の参加者が必要であると理解されていた。しかしながら、ある人間の塔のグループが参加者を把握するために導入した指紋認証システムは、単に誰が参加しているかということにとどまらず、10段からなる人間の塔が、従来想定されていた人数の半数程度でも形成可能であることをも明確にしてしまった。人間の塔における活動はそもそも人びとの自由な参加によって成立しているため、誰が実際に参加するかは、当日にならないとわからない。そのため人間の塔は、参加する人びとに対する管理をするか否かでつねに揺れてきたという事情があった。けっきょく、グループの幹部たちはこのデータを一般メンバーには公表せず、指紋認証システムを、出席確認のためだけに利用することにした。

岩瀬の観察によれば、こうした判断がなされたのは、正確な必要人数を公表することが、人びとの参加にたいする意欲を削いでしまう可能性があることとみなされたからである。参加者たちの身体技法を持ち寄ることを通じてのみ実践される人間の塔では、その基盤である人びとの参加をテクノロジーが疎外する可能性に、敏感にならざるをえない。人びとのふるまいを再編するというテクノロジーの特徴は、それを利用する人びとによっても意識され、対処されているような特徴でもあるというわけだ。

### 研究方法としてのテクノロジー

筆者は、「想い起こすことの支援——日常的実践と専門的なテクノロジー」と題した報告において、研究者たちがフィールドワークなどをおしてデータを記録、転記そして収集したりする活動を主題化している。平田や岩瀬に対して、筆者の研究は、テクノロジーが日常生活に浸透するという事情が研究者たち自身にとっていかなる課題であるかを記述するものだ。

研究者たちは研究活動のさまざまな段階において、フィールドで得られたデータを音声レコーダーやビデオカメラによって記録したり、それらを詳細なトランスクリプトへと転記したり、収集したりすることがある。レコーダーから専門的なソフトウェアにいたるさまざまなテクノロジーの利用は、こうした研究者

たちの活動にとって欠かせないものである。だが周知のように、こうしたテクノロジーは、対象となっている人びとの実践を十分には表象しきれなかったり、反対に、人びとの実践を当の人びと自身が認識可能なまやかさをこえて、過剰に表象してしまったりすることがある。以上のことを踏まえれば、テクノロジーがそなえるこうした特徴は、研究を通じて得られる知見を、根本から疑わしいものにしてしまいうる特徴にもみえるだろう。

とはいえこの疑いは、テクノロジーを、人びとの実践を表象するという目的のためだけに利用しようとしたときに、はじめて発生する疑いである。そこで筆者は、エスノメソドロジー研究(Garfinkel 1967)におけるテクノロジー利用をめぐる議論を検討することで、専門的なテクノロジーの利用を、実践を表象するのとは異なる方針において正当化することを試みている。それは、分析対象となっている実践において利用されている公的な概念を分析者の側で「想い起こす」(Coulter 1983)ために専門的なテクノロジーを活用する、という方針である。もちろん筆者が提示するこの方針は、あくまでもひとつの小さな方針にすぎない。とはいえこうした方針はまた、テクノロジーが日常生活において一般化するという状況に対して、研究者たちがどのように向きあいうるかについてのひとつのあり方を示すものともなるはずだ。

平田、岩瀬、そして筆者の研究を並置してわかることのひとつは、冒頭でのべたような身体技法論を更新していくための2つの方針は、けっして分離してはいないということだ。すなわちテクノロジーが日常生活に浸透することは、研究対象となっている人びとだけにとつての課題ではなく、それを主題化する研究者たちにとつての理論的な課題でもある。同様に、テクノロジーが人びとのふるまいを再編していくという課題もまた、研究者だけでなく、人びとにとつての実践的な課題となっている。

だからこそ、人びとの身体技法をとらえなおしていくための道具だてもまた、多様でなくてはならない。本研究が、「学際的研究」として実施されなくてはならないのもまた、そうした理由によるのである。

### 【参考文献】

- モース、マルセル 1976『社会学と人類学II』有地亨・山口俊夫訳、東京：弘文堂。
- Coulter, J. 1983 Contingent and A Priori Structures in Sequential Analysis. *Human Studies* 6(4): 361-76.
- Garfinkel, H. 1967 *Studies in Ethnomethodology*. New Jersey: Prentice-Hall.

### よしかわ ゆうき

慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程。専門は社会学・文化人類学、エスノメソドロジー研究。論文に「チューニング場面の相互行為分析——いかにしてピッチが合うことを成し遂げるか」『三田社会学』22: 85-98(2017年)、「プラクティス(練習)のなかのプラクティス——ひとりで言う演奏における『誤り』の理解可能性」『三田社会学』23: 73-86(2018年)など。